

古代ギリシア・ローマの地理学史上におけるカスピ海の問題

三八

古代ギリシア・ローマの地理学史上におけるカスピ海の問題

田 中 穂

積

目 次

序

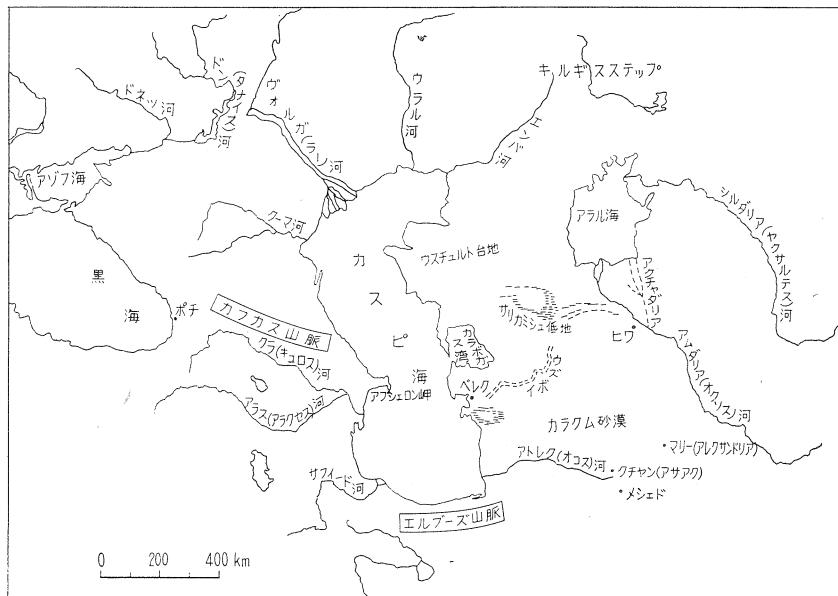
- 一 ヘカタイオスとヘロドトスの記述
- 二 アリストテレスの記述
- 三 アレクサンдр罗斯東征後の東方地理知識の拡大
—パトロクレスのカスピ海探検とポリュクレイトスの記述
- 四 ローマの東進とカスピ海周辺の地理知識の発展

結 語

序

西洋古代の地理記述について、とくに東方に関する地理知識の発展という観点から、西アジアより中央アジアに至る地域に関する諸史料を考察するとき、地域・河川・民族等について非常に多くの難問を提示している。ことに一九世紀の後半以来、この問題を解決するため、幾多の異なつた見解が発表されてきた。⁽¹⁾もとより、その難解な理由として、遠隔地を対象とした諸史料が伝聞をもととし、時には正しく、またある場合には奇異の念をもつて記述されているため、正確にとらえがたいということにある。

いま、ここに古代におけるカスピ海の記述についてみても、それに關する知識の変遷から、多くの問題を含んでいる。その第一は、カスピ海の形状をある時代にはやや正しく、またある時代には誤つてとらえてきたことにある。つまり、最初にカスピ海の存在を記したヘカタイオスは、北は外洋オケアノスに連なるとい



第1図

い、一方ヘロドトスの場合は内陸海とした。次にアレクサンドロスの東征以後、ペトロクレスがこの海を探検したにもかかわらず、再び北は外洋に接すると認められた。これがまた内陸海とされたのは、クラウディウス・ブトレマイオスの「地理学」において再現されてからである。ところがこのブトレマイオス以後、ことに西洋中世においては、東方の地理知識は停滞し、カスピ海はまた外洋と接することとなつた。もちろん、それぞれの形状の変化に応じて、その大きさも変化している。このように幾度か書き換えられたことは、いかにカスピ海北方、ないし東方の地理事情の把握が困難であつたかを示すものであり、その知識の変遷はこの海の北辺交易路の消長と密接な関係にあつたものと考えられる。また、古代を通じて、明確にアラル海の存在が指摘されたことはなく、それにマイオティス Maiotis (アヅフ) 海の大きさは常に過大視されていて、一度も正確に記されたことはない。第二には、カスピ海の形状のとらえかたによって、その海の周辺と、東方の地理概念が變つてくる。そのため、著名な河川の名称と、その流れる方向が非常に混乱している。第三には、古代の東西交通上におけるカスピ海の利用度が問題となる。その役割は文献上ほぼ前三世紀の初め以後認められており、インドの物資はオクソス Oxos (嬌水、アム・ダリア) 河を下つてカスピ海を通り、黒海沿岸に運ばれたといわれるが、この問題を取り扱うためには、オクソス河について十分検討しなければならない。ところが、現在アラル海に注ぐこの河は、過去の一時期にサリカミシュ低地からウズボイ河谷を流れ、カスピ海に達したのであるが、しかし幾度かその流路を変えており、文献に記された時代においても流れを正確にとらえがたい。そのため、アム・ダリア河の調査ならびにそれに関する論議は今日に至つており、ソ連では一九四〇年代の後半以後、ことに一九五〇—五五年地理学と考古学の両分野から大規模な調査をおこなつた。その結果ウズボイ河谷がカスピ海への水路となつていたのは新石器時代であつて、のち流水は減少し、古代文献に記された時代には、すでにその流れを停止していたと結論づけている。⁽³⁾

いまあげたような問題を、それについてみて、直ちに十分に解決することはできない。それゆえ、ここではカスピ海についての主要な記述をとりあげながら、主としてアレクサンドロスの東征によつて東方の地理知識が飛躍的に拡大された時代以後に重点をおき、この海に対する概念がいかに変遷していくかを、各史料の系譜をたどり、古代地理学史上の東方に関する一問題点としたい。

註(1) 古代の東方地理について、諸説の簡潔な説明と参考文献を網羅した概説書として Thomsom, J. O., History of Ancient Geography. Cambridge, 1948. 織田武雄「古代地理学史の研究」柳原書店、昭和三四年がある。

(2) カスピ海に関する主要な古代文献史料の解説については Hermann, A., Kaspisches Meer. P. W. K. X, 2. (1919) 2275 — 2290 参照。

(3) 発掘成果は、すでに春山陽坪「ソ連に於ける中央アジアの考古学的研究—特にエス・ペ・マルストフの業績について—」史学雑誌五九—八以後紹介されているが、ことに S. P. Tolstow, B. Spuller などにて一連の研究が続いて發表されている。それらは未見であるので、ここに加藤九祚「アムダリア下流部の謎—涸れ谷ウズボイをめぐって—」地理八—五・六を参照した。この報告によると、前八—五世紀すでに現在の河道をとつていたアム・ダリア河から、灌漑農耕のためアクチャ・ダリア・デルタとサリカッシュ・デルタへの運河工事がおこなわれたとされる。このくわゆる、わずかの水量がウズボイへ流れたことの考えられよう。しかし、およそ前七—六世紀以後、ウズボイ河谷岸に定着民の痕跡はみられないとされている。また、四世紀以後ホラズム灌漑網が侵略者のためにしばしば破壊されて、ウズボイに水が流れしたことあるが、文献史料によつてアム・ダリア河道の変遷を結論つけた V. V. Barthold の示すように、一二—十四世紀から一五七三年までカスピ海に注いだことはあらゆる、おだうズボイの規模からアム・ダリア河の水量を、そのおお流すところではないか。

その他、V. V. Barthold の業績については「バルトメリヤ全集」、その中で長沢和俊訳「中央アジア史概説」(Istoriya Turkestana) 角川書店、昭和四一年がある。Tarn, W. W., The Greeks in Bactria and India. Cambridge, 1951. 491 ff. Spuller, B., Amū Daryā. Encyclopaedia of Islam. I. (1960) 454 ff. 本田美信「アムダリア」アシニア歴史事典(平凡社)。

— ヘカタイオスとヘロドトスの記述 —

ギリシア人の地理知識の発展段階を考察するとき、まず最初にホメロスの詩篇にあらわれた世界像が挙げられるであろう。そこに描かれた世界は、エーゲ海ならびに東地中海を中心とした地域であり、その知識はフェニキア人によつて伝えられた地理概念、あるいは各地の諸伝聞を混淆したものとおもわれる。しかし、そこには、まだカスピ海について全くふれていない。ついで前八世紀半ばから約二世紀間、ギリシア人の植民活動の盛んな時代に、黒海沿岸には多くの植民市が建設されているが、この植民を通じて、黒海周辺の事情がギリシア人の間に広く知られ、それらの知識をミレトスのヘカタイオスは十分に利用したであろう。

このヘカタイオスは前六世紀末から五世紀初めにかけて活躍した地理学者ロゴグラフオスであつて、同じミレトスの賢者アナクシマンドロスが作成した地図を基にして世界図を描いたといわれる (Strab. I 1. 11)。それはイオニア自然学派の影響を受けたもので、地上は周囲をオケアノスに囲まれて扁平状をなし、世界の中心を地中海とした。また、そこにはカスピ海、黒海、ペルシア湾、紅海の四大入海の存在を認めており、そのうち黒海を除いて三入海がオケアノスに接するという地理概念は、後代のストラボンの「地理書」、ならびに大ブリニウスの「自然誌」にまで影響を及ぼしたと考えられる。また、ヘカタイオスはヨーロッパと、リビアを含めたアジアとの二大陸を想定し、地中海、黒海、マイオティス海、カスピ海を結ぶ線をもつて、両大陸の境とみなしたとおもわれるが、そこには明確な地域の区別が存在したわけではない。⁽²⁾

ところで、ビザンティウムのステファノスの著「民族誌」に多く引用されているヘカタイオスの逸文から知られるように、ヘカタイオスは「地理書」一巻を著わしている。その第一巻のアジアの部分において、初めてカスピ海ヒュルカニア Hyrcania 海の名によって記しているが、その名称はこの海の南岸に位置するヒュルカニアの地名に因んだものである。ヘカタイオスによれば、ヒュルカニア海の周辺には高い密林の山があり、その山頂にはいばらの木があるとし、またバルティア族の東の地にはコラスミオイ族が平野と山地に居住しているが、その山にもいばらの木が自生していると述べている。⁽³⁾ その他、ヘロドトスも記述しているメランクラエリ Melanchlaeni、イッセドネス Isedones、マツサゲタイ Massagetai（マテュケタイ）の民族名を挙げている。⁽⁴⁾ しかし、ヘカタイオスは、ことにヘロドトスがカスピ海北方ないし東方に位置させたイッセドネス族、マツサゲタイ族をヨーロッパ・スキタイの一部族としている。このことはヘカタイオスにとって、カスピ海が北方オケアノスの入海であつたから、そのようなギリシア人に知られた民族名をカスピ海西方に配さねばならなかつたものとおもわれる。しかし、ヘカタイオスがカスピ海の形状について誤った概念を持っていたとしても、すでにイッセドネス族、マツサゲタイ族の名を挙げていることは、当時スキタイを中心とするカスピ海北辺の交易が盛んであつたことを示しており、このことはヘロドトスの記述において非常に詳しく述べる。

ヘロドトスによると、イオニア地方のギリシア人がペルシア帝国に対して反乱を企図したとき、ミレトス市の僭主アリストゴラスはスバルタ王クレオメネスを訪ね、世界のあらゆる海と河川が彫られた青銅板の世界図をみせ、スバルタの助力を請うたと述べている (Herod. V 49)。この世界図の詳細については知りがたいが、ヘロドトスの記述から想像すると、小アジア西岸のギリシア諸市を中心に、北は黒海ないしカスピ海周辺で漠然としていたものとおもわれ、多分イオニア自然学派の地理知識を結集したものである。また、ヘロドトスは多くの人が地図を作成し

ているが、それらはコンペスによつて描かれたよつた圓形地上で、それもヨーロッパとアジアとが同等の大きさであり、その周囲をオケアノスの流れがとりまいている地図であるところ (Herod. IV 36)。したばく勿論アナクシマンドロス、カタイオス等の地図を描いてゐるのである。ヨーロドースはそれらを滑稽とあめつけ、イオニア学派を批判してゐるのである。そのような世界像を否定するヨーロドースの主張の根拠は、広く各地を旅行し、その見聞を集録し、正確に記すことを目的とすることにあつたが、しかしその実証的態度はイオニア学派の伝統を受継いだものといつてよからぬ。ヨーロドースの世界とは、ヨーロッパ、アジア、リビアの三大陸を想定し、その周囲をとりまくオケアノスの存在を否定した。つまり、ヨーロッパの北部は未知の大陸とし、この大陸はコルキス Kolchis の フラシス Phasis 河—カスピ海・アラクセス Araxes 河を結ぶ以北をもつて東方に拓がるのみとなした (Herod. IV 37—45)。このアラクセス河の名称、位置、流れについては多くの問題点を含んでゐるが、後で取上げたい。しかし、彼の旅行範囲として、北は黒海北岸のオルビア Olbia、また東はバビロンにまで達したとおもわれることから (Herod. IV 71, I 181)、カスピ北方の民族やペルシア帝国の事情にある程度通じており、それゆえヨーロドースにおいて、初めてカスピ海が内陸海として認められたのである。

すなわち、ヨーロドースによれば、ギリシア人の航行する海、アトランティスと呼ばれるラクレスの柱の外の海、エリュトウラ海も結局は一つであるが、カスピ海のみは異なつていて孤立し、この海の長さは橇を使ひ一五日の行程、幅は最大のところで八日の行程としている (Herod. I 203)。こゝで一五日の行程をどの方向にするかについては明記していなかつた。しかし、この海の周辺の河川や民族の位置から、また黒海の記述例からして (Herod. IV 86)、長さを東西にするが、その方向に長く、南北に短くなり、その形は後代のアトレマイオスの記述と似通うが、現在の形とは全く反対となる。また、一五日行程は、一五昼夜として計算すれば、長く見積つてほぼ一九五〇〇スタディ

ア、八日行程は、八昼夜として一〇四〇〇スタディアとなつて、實際より非常に大きくなる。しかし、クロドトスの述べるカスピ海の大きさが探検によつて測定されたという根拠はなく、伝聞によつたものである。そのうえ、古代においては陸路より、海路の距離の方が測定しがたいという理由と、航行日数をもつて距離計算をおこなうため、大体の場合過大に見積られる傾向がある。

やへにクロドトスの述べるカスピ海の周辺についてみると、西方岸にはいかなる山脈より大きく高いコーカサス Kaukasos 山脈が聳え、この山麓には種々の人々が住み、ほとんどの者は森林からそれる野生の物を食物としている。また、その海の東、すなわち日の出の方向には見渡すかぎり、はてしない広漠とした平原がひろがつており、マツサゲタイ族はこの平原の少くない部分を占めている。やへに、この海に注ぐ唯一の河として、アラクセス河の分流を挙げている。アラクセス河はマティヨニ Matieni 族の土地から流れはじめ、四〇の河口をもつて流出してい、カスピ海へ流入する一つの例外を除いて河は全て沼澤に注いでいる。また、そこに住む者は生魚を食し、海豹の革を衣類にするといわれてゐる、ところ (Herod. I 202—204)。むしろや、このアラクセス河はハリス Halyss 河畔のマティエイ族ではなく (Hecat. F. 287, Herod. I 72)、クロドトスがペルシア帝国を二〇のサムラッピーに区分している、その第一八区中のサスペインス Saspesires 近くのマティエニ族の土地から流れるとみなしたのであるう。また、この民族はメディア人の北に位置したと考えられ (Hecat. F. 288, Herod. IV 40, Strab. XI 8. 8)、カスピ海の南西方向となる。したがつて、マティヨニ族に關係あるアラクセス河は現在クラ河に合流するアラス河を指すものとねらわれる。このクラニアラス低地はよく河川網が發達しており、クロドトスもこのステップ地域を述べたのである。

しかし、クロドトスの全記述からみて、別のところで述べているアラクセス河がコーカサス地方の河ではなく、ヤ

クサルテス Jaxartes 河ないしオクソス河、あるいはアトレンマイオスが初めて記したラーア Rha (ホオルガ) 河を指すものとねもねれ、クロドースがアラクセス河の河名を混乱して用いたと解釈される。⁽⁶⁾ ものや、これがアラクセス河の記述を整理し、カスピ海との関連を考察することにしたい。まず先に挙げたアラクセス河はトマティニ族の土地より発する河である。①田の出の方向にアラクセス河を越えてマッサゲタイ族が住む (Herod. I 201)⁶。②キヨロスがカスピ海東方の広漠とした平原に住むマッサゲタイ族を攻撃するため、アラクセスを渡河した (Herod. I 204—216)⁷。④アジアに居住していた遊牧民スキタイはマッサゲタイ族に圧迫されアラクセス河を渡り、キンメリア Kimmeria 族の土地を占領した (Herod. IV 11)⁸。⑤ヘジアの東方部として、クロドースは北限をカスピ海の田の出の方向に流れるアラクセス河とする (Herod. IV 40)⁹。アラクセス河はイストロス Istros (タリョーバ) 河に比較して、大小両方の伝えがあり、その河中にはレスボス島大の島があるといわれ、と述べてある (Herod. I 202)¹⁰。しかし、①は問題外として、②③についてはアラクセス河をカスピ海東方とみなさなければならぬ。クロドースはペルシア帝国の第一大サトラップの中にバルティア、コラスミオイ、ソグディ Sogdoi アリ Aria 各族の名称を挙げているが (Herod. III 93)¹¹、これらはヒンドウクシュー山脈とイラン高原の間からアラル海にかけて居住していた民族である。しかし一方、マッサゲタイ族はカスピ海の東方に位置すると述べてるのであるが、特にそれら両者の位置関係を説明していない。このことはクロドースがカスピ海東側の地理について正確な知識をもつていなかつたことを示すものであり、またそれはアラル海の存在を知らなかつたことからもうかがえる。したがつて②③のアラクセス河とは、カスピ海に注ぐとみなしたヤクサルテス河、またはオクソス河を指したものとねもねれる。

このように、一つのアラクセス河をカスピ海東方に置く見解が最も妥当である、と一般に考えられているが、その論拠に異論はない。しかし、前述の四点は明らかにカスピ海北方のヴォルガ河 (あるいはウラル河) を指していると

おもわれる。⁽⁷⁾ このヴォルガ河とみなす見解は、從来特に強調されてはいないが、ヘロドトスが記しているスキタイとカスピ海北辺民族との交易、すなわち著名な北方交易路を考察するとき、当然問題としなければならない。つまり、ヘロドトスによれば、スキタイが交易のため、伝説ではない東方の民族アルギッペエイ Argippaei 人のうちに至るには七人の通訳と七種の言語を必要とし、やがてその東にイッセドネス族が住むと述べてゐる (Herod. IV 24, 25)。ヘロドトスは七種の言語、すなわち七種族を特に明記していないが、ともかく王族スキタイ領を過るタナイス Tanais 河を渡るとスキティア領ではなく、サウロマタイ Sauromatai 族がマイオティス海北岸から北へかけて居住しており、その地域は一五日行程である。奥へ進むとブディノイ Budinoi 族、その北は七日行程の無人地、ついで東に転じるとテュサゲタイ Thysagetai 族、イユルカエ族が住む。この奥には別個のスキタイ、やがて奥地へ行けば、高山の麓に住む禿頭のアルギッペエイ族の所に達し、その奥には越へることのできない高山がある。やがて北にはヘロドトス自身信じていない民族名を挙げている (Herod. IV 13—25)。それは別問題として、アルギッペエイ族の位置であるが、それは從来トレマイオスの記述と比較検討して、論議されてきたアルタイ山麓、またウラル山麓のいづれであろうか。その結論は断定しがたいが、ヘロドトスはアルギッペエイの東にイッセドネス族が住み、またイッセドネス族はカスピ海東側のマツサゲタイ族に対していく、スキタイの一部ともいわれると述べている (Herod. I 201)。ここでヘロドトスの記述どおりに従えば、アルギッペエイ族とイッセドネス族の占める場所はウラル山脈を挟む東西地域と考えられるのである。ともあれ、ヘロドトスが東方に至る各族をカスピ海北方の地理事情から説明していることは、この海を南北よりも東西に非常に長く見積る結果をまねいたとおもわれる。したがつて、そのような形狀のカスピ海の北に、前述⁽⁶⁾のようにイストロス河と比較したアラクセス河、すなわちヴォルガ河を認めていたのではないが、ということは十分に推定であつう。ただし、この河が東流するというのは、コーカサス地方のアラクセス河と混

同したためであるのみならなければないだ。

このようにカスピ海を中心として、ローヌ川の述べる東方地理を考察するにあつて、先に挙げたヨーロッパとアジアの境界で問題となるアラクセス河とは、前述四にみたるよろど、アジアのスキタイがマサゲタイ族に圧迫されて、ヨーロッパとアジアの黒海北岸に侵入したといふことからして、おたガオルガ河を指すものであらう。それにヨーロッパがアジアヒンディアを合わせた長さを持つと述べているのは (Herod. IV 42)、カスピ海北方から奥地の極北に至る未知の大陸を含めているかいである。このもうな問題は、次に述べる所によつてアリストテレスがタナイス河とアラクセス河が連続するゆゑのいきなりしかば、アラクセス河がカスピ海北方の河であるしかが一層明確になつてしまふ。

- (1) F. Gr. H. F. 36. カタイオスの逸文は Muller, C., Fragmenta Historicorum Graecorum (FHG) I. (1841) に取
められているが、現社 Jacoby, F., Die Fragmente der griechischen Historiker (F. Gr. H.) I. (1923) の方が多く
集録し、よく使われてゐる。歴史編では F. Gr. H. と従つた。
- (2) Pearson, L., Early Ionian Historians. Oxford, 1939. 62ff.
- (3) F. Gr. H. F. 291. 292.
- (4) F. Gr. H. F. 185. 189. 193. カタイオスはベキタヤの一部族 Matyketai (F. 189) といふが、これはなぜか
Massagetai と書かれている。Person, L., op. cit., 63.
- (5) ヨーロッパによれば、通常1日のは行程は昼間の日の長い時で7万オルグィア、夜間は6万オルグィア、やむを得ざれ七
〇〇スタディア、六〇〇ペタニアであるといふ (Herd. IV 86)。おた、ベキタヤのマリアルバにちゆつと、昼夜とも
その航行距離は各五〇〇スタディアとみなしてある (Skyrakos Karyandeos Peripous. § 69. GGM. I. 58.)。いふにいふ、
古代においてローマ・マイル (約一四七九・二メートル) は大体一定していたのに對し、一スタディオンの単位の長さは、時
代または地域によって長短各様の異なつた数値がみられ、一定していなし。たゞえども、アッシティカ基準によれば、一マイルは
一千スタディアで、この場合一スタディオンは一七七・五メートルとなるが、最も広く用ひられたのはローマ帝国支配時代の一
〇〇

マイルをハスタディアとする数値で、一スタディオは一八四・九メートルなど（村川鶴太郎訳「ヒューメル海案内記」1111頁以下）。織田武雄「古代地理学史の研究」11九九頁 Lehman-Haupt, Stadion. P. W. W. K. III, A, 1952ff. Thomson, J. O., op. cit., 161.)

勿論、クロムベの使用した「スタディオ」の長さを正確に知ることはできないが、かりに一八四・九メートルを用ひるべくロムベの述べたカスピ海の大ささ、東西1150里・五、南北1九11里など、実際の大ささ、約東西1118里、南北四四〇（単位キロメートル）に対する非常に過大視されてゐたと考えられ。

(6) Bunbury, E. H., A History of Ancient Geography. (1883. Dover ed., New York, 1959) vol. I. 223ff. Minns, E. H., Scythians and Greeks. (1913. 2nd ed., New York, 1965) 30ff. How, W. W. and Wells, J., A Commentary on Herodotus. I. Oxford, 1928. p. 152. Thomson, J. O., op. cit., 79. 織田武雄、前掲書、九11頁。

(7) Minns, E. H., op. cit., 44. 織田武雄、前掲書、九11頁。
(8) クロムベの述べた北方の交易路、たゞひとアルギッペイ族、イッヤムベ族の民族、居住地域について Tomaszek, W., Kritik der ältesten Nachrichten über den scythischen Norden. (Sitzungsber. Akad. Wien. Phil. Hist. Cl. 116, 117. 1888). の類似な記述のせる。Minns, E. H., op. cit., 106ff. E. Meyer, F. v. Richthofen, A. Hermann, A. Berthelot, G. H. Hudson, M. Rostovtzeff, 等にもうつし込まれてゐる。その簡単な説明については Thomson, J. O., op. cit., 62ff. 参照。また、本邦における研究には田島庫吉「西域史研究」上、石田幹之助「支那ヘリコロハムの體の歴史の通商路について」社会經濟史学九一一・一一、井上智勇「古代に於ける亞歐關係史の一齣」西洋史説苑。111、織田武雄、前掲書一一五頁以下、長沢和俊「シルクロード」校倉書房、一九六一年、三五頁以下がある。

II ハリストヘンスの記述

アリストテレスは「気象学」の中で、さうみても互いに連らない海があるといふ。つまり、ヒリョトウハ海はただ細長い海峡によって、その外の海と連らなつてゐるが、ヒュルカニア海とカスピ海は外洋に続かず、その周

間に住民がいる、と述べている (Met. II 1. 354a)。こりではヒュルカニア海とカスピ海を別個のものとして併記しているのであるが、他の記述からみて上記⁽¹⁾の海のいづれかが、黒海あるいはマイオティス海を指しているとは考えられない。したがつて、この問題については、カスピ海を内陸海と認めていることを前提条件として、次のような解釈ができるよう。(1)ヘカタイオスのいうヒュルカニア海、ヘロドトスのいうカスピ海、この二つの名称を持つ海を二つの海と誤って記述した。⁽¹⁾特にW・W・ターンの主張するように、ヒュルカニア海を現在のカスピ海とし、カスピ海がアラル海に相当するという推論。⁽²⁾(2)アリストテレスの記述中、両海の併記はただ一度しか見当らないことから、いま挙げたいずれとも断定しがたく、偶然の記述ともみなされる。いまこれらの三推定を考察すると、特に問題となるのは(1)の論拠であるが、もしそれが可能であるならば、アリストテレスの東方地理に関する知識はヘロドトス、あるいはむしろブトレマイオスを凌駕し、正確であったといわねばならず、アラル海の存在を指摘したという観点からすれば、アリストテレス以後地理知識は後退したとみなければならない。しかしながら、そのまえに古代においてアラル海の存在が、決して明確に認められたことはなく、絶えず漠然としていたということに留意しなければならず、直ちにW・W・ターンの見解を無条件で受け入れることはできない。

そこで、この問題を検討するためにアリストテレスの述べる東方の山脈、河川について考えてみたい。つまり、アリストテレスによれば、アジアにおける多くの、また最大の河は冬の日没の方向(南西)にあつて、一般に全ての山脈のうち最大といわれるペルナソス Parnassos 山脈から流れる。そして、この山脈を越えると外洋がみられるが、しあそれ以東の世界は不明である。ペルナソス山脈からバクトロス Baktria 河、ニアスペス Choaspes 河、アラクセス河が流れ、アラクセス河の端からタナイス河が分流していく、マイオティス海に注ぐ。また、その山脈から最大の河インドス Indos が流れている。他方、コーカサス山脈から多くの河が流れているが、その最大のものはファシス河

である (Arist. Met. I 350a)。このやうなアリストテレスの山脈と河川に関する見解は、クニドスのクテシアスに由來するいわねて⁽³⁾いる。このクナシトス「世はダライオス一世」とアルタクセルクセス一世の侍医として、一七年間ペルシア宮廷に仕え、のち帰国して「ペルシト誌」⁽⁴⁾三卷、「イハム誌」⁽⁵⁾一卷を著わした。「ペルシア誌」は主としてペルシアの歴史を取扱つてゐる。そこにはバクトリアについても記してゐるが、しかしその地域の河川に関する詳しい記述を試みたとは考へられない。また「インド誌」から、四世紀初めエリアヌスが各種の動物について多くを、九世紀にフォティオスが誇張と虚偽に満ちた物語を、それより紹介してゐるが、アリストテレスの場合も主として象に関する引用であり、地理事情の引用は見当らぬ (Arist. His. An. II 2, III 22, VIII 28)。したがつて、アリストテレスがクテシアスの名を挙げずして、ペルナソス山脈、すなわち、後にペロペニソスまたはペロペニノスと呼ばれたヒンドウクシュー山脈と、そこから発するアラクセス、バクトロス、コアスペスの流れを記してゐることは、それが確かにクテシアスに由来するとは断言できない。バクトロス河、コアスペス河については両方ともストラボンは記してゐるが、ヤクサルテス河、オクソス河に比して小かく、後代のアーリヤイオスの場合、記してない。^{ゆとりより}、「ペルシア誌」を著わしたクレイタルコスの父ディオノ、またはヨハニロスが東方事情を述べた際、その河名を挙げたとは考へがたい。

ところで、アレクサンドロスが東征に際して常に念頭においたのは、師アリストテレスの地理概念であつたとねむわれる⁽⁶⁾。したがつて、アレクサンドロスは東征中、また東方事情をアリストテレスに伝えていたことも考へられ、アリストテレスはその報告を基として、従来の東方地理知識を勘案しつゝ、「気象学」の中に東方の山脈、河川のことなどを記したのではないか。これが、トリストーロスの断片をみると、アレクサンドロスの越えたコーラカサス山脈はアジアで一番高く (Arrian. III 28, 4—5)，実見したアジアの河ではインダス河を除いて、オクソス河が一番大き

い、といふ (Strab. XI 7. 3)。この「ーカサス、すなわちヒンドウクシュー山脈、それにオクソス河あるいはヤクサルテス河についても、それらの名称は初めてアリストブーロスにみられる。つまり、アレクサンドロス東征以後、その遠征記録にそれらの名称があらわれるのであって、東征中には山脈、河川の名称について非常に混乱があつたことは当然である。

そこで、アリストブーロスと、先のアリストテレスの記述を比較するとき、名称の違いを別とすれば、多分に類似していることが次のことから考えられよう。つまり、バクトロス河、コアスペス河（コーエン河）の支流はいずれも土地名に由来し、アラクセス、オクソス、ヤクサルテス等の河はそれ自体河名である。このことは、アレクサンドロスがヒンドウクシュー山脈を越えたとき、そこから流れる実見した河を地名によって呼び、またアリストテレスに報告したのであらう。アリストテレスは、その山脈からアジア最大の河が流れるというのであるから、アリストブーロスの記述と比較して、バクトラ Baktra 近くを流れるバクトロス河の名をもつて、実際にはオクソス河を指したものとおもわれる。

ところで、アリストテレスによれば、アラクセス河がペルナソス山脈から流出で、その分流がタナイス河となり、マイオティス海に注ぐとしている。この表現からすると、その流れはカスピ海の東から北を通らなければならぬ。これはヘロドトスの記述にあらわれた二つのアラクセス河、つまりヤクサルテス河とヴォルガ河を、その名称が同じであるために混同して、同一の流れとみなし、これにタナイス河を結びつけたものと考えられる。すなわち、ヨーロッパとアジアの境界を、ヘカタイオスによれば、ほぼタナイス河、ヘロドトスによればアラクセス（ヴォルガ）河であったのを、ヘロドトスのいうアラクセス河を次第にヤクサルテス河とみなすようになり、両大陸の境界といふ点から、ヤクサルテス河とタナイス河を関係ある流れとしたのであらう。ことにアレクサンドロスは東征中、ヤクサ

ルテス河がタナイス河であるとも想像し (Arian. Alex. III 30)、また後にカスピ海が北のオケアノスに続くかどうかを探検させたように、当時この海の東方ないし北方の地理について非常に混乱があつたことは事実である。

しかし、アリストテレスは明らかにヘロドトス以後の伝統によつて、カスピ海を内陸海とみなし、アレクサンドロスにも十分知られていなかつたというマイオティス海を、ヘロドトスと同様に黒海と同等の大ささとしている。ここにアリストテレスによる東方地理の記述は、ヘロドトス以後の知識と、アレクサンドロスの東征中、ないしはその後の知識を合成したと考えられ、従来の見解のようにアレクサンドロスの東征以前とはみなしがたい。

そこで、問題はアリストテレスの述べる二内陸海であるヒュルカニア海とカスピ海のうち、後者がターンの主張するようにアラル海を指すものであろうか。ターンはアリストテレスの地理記述がアレクサンドロスの東征以前と考えている。しかし、アリストテレス以前、現在のカスピ海とともに、さらに他の内陸海を認めた事実が全く見当たらなことは、ターンのようにカスピ海の呼称をアラル海に当てはめる必要条件を満たし得ず、その論拠は絶対的でない。また、ターンはアレクサンドロスがバクトリアに達したとき、コラスマニアの王ファラスマネスからアラル海の存在を聞き知つたと推定している。このことは、もしアリストテレスが確かにアラル海の存在を知つたとすれば、むしろアレクサンドロスから伝えられたともわれ、当然アリストテレスはアレクサンドロスの東征による地理知識を得たと考えねばならない。ここにターンによる論拠の飛躍に限界が認められるのである。したがつて、アリストテレス以前、あるいはその後アレクサンドロスの遠征を記した史家によつても、アラル海の存在は認められず、またヤクサルテス河がカスピ海に注ぐとみなされたことは、アリストテレスが東方地理知識の拡大された混乱の時期に、二名称を持つカスピ海を誤つて二つの海と記したのであろう。

以上のような考えからすれば、アリストテレスの記述は次に述べるアレクサンドロスの東征とともに問題にすべき

ではある。しかし、東方地理知識の変遷を通してアリストテレスの見解をみると、それはクロムヌス以来の伝統から、また異なる地理概念、ことにヒュトステネスの記述に至るまでの過渡的な立場にあつたといえよう。

- 註(1) Bunbury, E. H., *A History of Ancient Geography*. vol. 1. p. 401.
(2) Tarn, W. W., *Alexander the Great. II.* Cambridge, 1950. p. 6.
(3) Thomson, J. O., op. cit., 84ff.
(4) F. Gr. H. 688.
(5) Pearson, L., *The Lost History of Alexander the Great*. The American Philological Association, 1960. p. 226.
織田武雄、前掲書一六二頁云く。
(6) Tarn, W. W., op. cit., 6.
(7) ibid., 8; Arrian. Alex. IV 15.

II アレクサンダロス東征後の東方地理知識の拡大—パトロクレスのカスピ海 探検とアリストクレイオスの記述

一

アレクサンダロスはペルシア帝国征討のため、前333-324年に東征軍を率いてペレスポンティを渡り、その後スサ帰還まで一年間、東は中央アジア、インドに至る地域を踏破した⁽¹⁾。その間、幾多の大会戦、決死の行軍を伴つたこの大遠征により、多くのマケドニア・ギリシア人がアジアの大山脈、大河、砂漠等を目前にしたこととは、結果として従来のギリシア地理学における東方の知識を一躍倍加させた。

このアレクサンドロス遠征の東方における行程をみると、エクバタナーへカムンピュロスースシア、南下してアリアのアルタコアナ Artaconana —アラコシア、北進してヒンドウクシュー山脈—バクトリア—オクソス河—マラカンダ Marakanda —ヤクサルテス河に達し、このフェルガナの地に「極限のアレクサンドリト」 Alexandria Eschate (Chodjend) を建設した。これをもって中央アジア遠征の限界とし、以後インドへ転戦する。しかる、この途路決してカスピ海またはアラル海に達したという記録はない。

ところが、アレクサンドロスが通過した遠征路周辺の地理事情について、いかに多くのことが不明であったかは、各地の探検を命じたことからも知られる。まず、インドよりの帰途にあたって、ネアルコスにインダス河口から、ペルシア湾への航行を命じたが、その船隊は北岸沿いに約四ヶ月間、一一一七〇〇スタディアの航海を経て、ユーフラテス河口に達する成功をおさめた。そこで、アレクサンドロスはバビロン帰還後、アルカイオスの子ヘラクレイデスに命じ、カスピ海が他の海に連なるかを探らせた (Arrian. Anab. VII 16. 1—4)。他方、アルキアスにはペルシア湾南岸の航海を命じたが、彼はテュロス Tylos ("クーレーン島) まで達して止む。やがて、アンドロテネスやソリのヒエロンが統いて派遣されたが、ヒエロンはアラビア半島を周航し、ヘロエポリス Heroopolis 近く (スエズ湾) まで達したにもかかわらず、アラビアがインドに劣らぬほど巨大な半島であるため航海を中止して引あがめられたといふ (Arrian. Anab. VII 20. 7—8)。再びアレクサンドロスは、ペルシア湾からエジプトへの航路開発のため、ネアルコスの派遣を定め、その準備も完了した。しかし、その後数日にしてアレクサンドロスがベビロンにおいて急逝したため、全ての計画は中止された (Arrian. Anab. XXX, Plut. Alex. 76)。ともあれ、これらの計画が、カスピ海から當時想定されていた北の海、東の海、インドをめぐつてアラビア海、紅海、やがてにアフリカ東岸を周航して、ヘラクレスの柱に至る海路発見の企図にあつたことは、あながち誇張ではなかろう。

アレクサンドロスの没後、約四〇年間にわたるディアドコイ時代、次第にアレクサンドロス遺領の大部分である西アジアに勢力を扶植していくのは、セレウコス一世を祖とするセレウコス王朝であった。この王朝とエジプトのピトレマイオス王朝は互いに自国領の発展を競った。後者が最初、紅海—アラビア海を結ぶインドとの通商航路の開発につとめたのに対し、セレウコス王朝は領内の東方領域から、インドに達する交通路の整備に重点をおいた。⁽³⁾ このことは、アレクサンドロスに倣つてアジアの要衝に多数の軍事植民地やギリシア風都市を建設したことからもうかがえる。⁽⁴⁾ それとともに、前三〇二年、メガステネスがマウリア国王チャンドラグプタ（サンドロコットス）の許に派遣されたことは、彼の著「インド誌」によって有名である。その後、ディマコスがインドに使しているが（Strab. II. 1. 9）、前二九四／三年、セレウコス一世は嗣子アンティオコス一世にユーフラテス河以東の攝政権を与え、共同統治政策をとった。これ以後、特に東方支配が強化されたとおもわれる。そのころ、ミレトスのデモダマスがヤクサルテス河を越え、セレウコス王朝の守護神ディデュマのアポロン神の祭壇を建立したが（Plin. N. H. IV 49）、おそらくその行動はサカ族の動勢を探る目的にあつたものと考えられる。⁽⁵⁾

もとより、セレウコス王国内の東方における主要幹線は、イラン高原を通ずる、いわゆる中央路線であった。しかし一方、アレクサンドロスの事業を踏襲することによって、それより北側の交易路開発を計画し、その調査のためパトロクレスによるカスピ海探検がおこなわれたのであろう。この探検はパトロクレスが、おそらくバクトリア、ヒュルカニアのストラテゴス（軍司令官）であった時期で、およそ前二八五／四—一八〇年の間とおもわれる。⁽⁶⁾

そこで、アレクサンドロスの時代から、初期セレウコス王朝時代のペトロクレスに至る探検の時代、カスピ海についての知識がどのように変化したかを次に述べてみたい。

アリアノスによると、アレクサンドロスがヘラクレイデスにカスピ海探検を命じた理由は、多くの民族が周辺に住

み、航行可能な河が流入するこのカスピ海またはヒュルカニア海と呼ばれる海の源を、まだ誰一人発見していないからであった。つまり、エリコトウラ海とも呼ばれるペルシア湾が大海の入海であることが確認されたように、カスピ海が他の海、すなわち黒海に連なるか、あるいはまた北の海に連なつていて、そこからインドへの航行が可能であるかを調査させた、と記している。また続けて、インドの河を除くと、アジアで一番大きなオクソス河がバクトリアよりカスピ海に流れ、またヤクサルテス河もスキティアを通つて流れる。一般的見解としては、アラクセス河がアルメニアよりこの海に流れる。カスピ海に注ぐ河のうち、これらが最も大きく、そこへ多くの河が合流するか、あるいは直接にカスピ海に流れる。そのような河のうち、ある河はアレクサンドロスとの地に達した人々に知られ、他是未知の土地である遊牧民スキタイの住む遠い湾の側に流れている、といふ（Arrian. Anab. VII 16. 2—4）。一方、ストラボンは次のように記している。ヒュルカニアはカスピ海に流れるオコス河とオクソス河によつて横切られている。オコス Ochus 河はニサイア Nysaia を通り、またオクソス河に合流するともいわれる。アリストブーロスは、イングの河を除けば、アジアでみた河のうちオクソス河が一番大めく、それに航行可能であるという。しかし、このことはアリストブーロスもエラトステネスもペトロクレスから得てゐるのであるが、と断つてゐる。そして、インドの物資がその河を下つてカスピ海に運搬され、この海を渡つてアルバニア Albania に入り、やがてキュロス Kyros 河を下つて黒海に出る、というのである（Strab. XI 7. 3）。このよつてアリアノスとストラボンの両記述には、オクソス河とヤクサルテス河がカスピ海に注ぐこと、またオクソス河を下つてカスピ海を渡る交易路が示されている。しかし、ヘニズム時代にはオクソス河がカスピ海に注いでいないと考えられることから、その水路による交通は疑問である。⁽⁴⁾

ところで、アリアノスの著「アレクサンドロスの遠征」は、中心史料にプトレマイオス 1世とアリストブーロスを

用いたとされる。特に前述したアリアノスとストラボンの記述は、明らかにアリストブーロスからの引用とおもわれる。アレクサンドロスに従軍したアリストブーロス、あるいはペマティスト（行軍距離記録者）達にしても、親しく中央アジアを実見したとはいえ、カスピ海周辺を一度も踏査したことはない。しかるに、ヤクサルテス河とオクソス河がカスピ海に流れるという根拠は、どこから得たのであろうか。それは、おそらくヘラクレイデスかパトロクレスの報告であったと考えられる。しかし、前者についてはアリアノスがただ名前を挙げているにすぎず、探検の詳細は全く不明である。それに反し、ストラボンによると、パトロクレスはインドならびに東方の地理を記述したといい、さらにオクソス河—カスピ海交易路については、パトロクレスの報告をアリストブーロスもエラトステネスも利用したとしているから、ここにアリストブーロスのカスピ海周辺に関する知識は、多分にパトロクレスに由来するものと考えられよう。

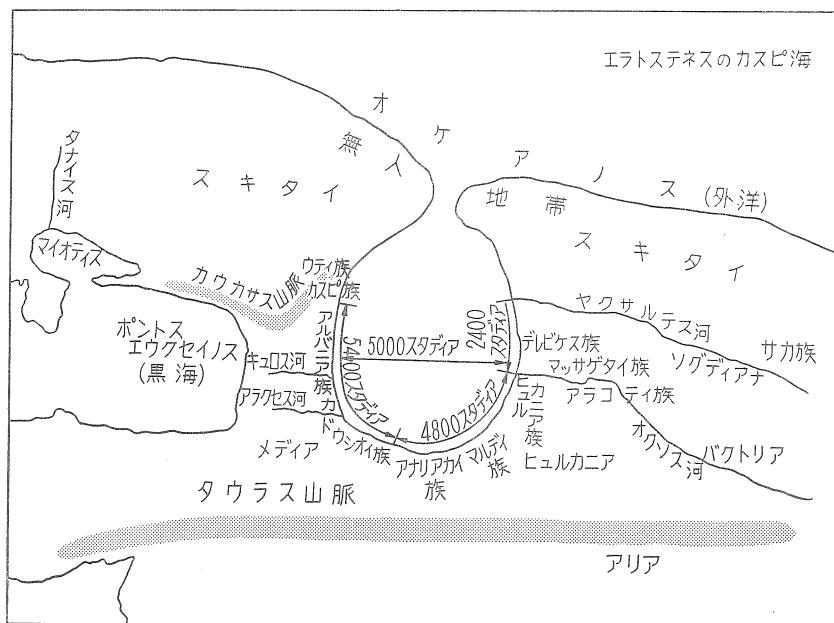
そこで、パトロクレスの地理的見解を考察するにあたって、まずストラボンのパトロクレス評をみると、彼の性格を信頼であること、それに地理については決して素人ではないゆえ、特に正しいと確信であるという（Strab. II 1. 2）。また、ヒッパルコスが引用したディマコス、メガステネスのインドの記述において、無口人、無鼻人、一目人等の伝説的な不可解な人間、または動物についてふれていることを酷評し、そのようなことを述べていないパトロクレスのみを正しいとして、これを用いたエラトステネスに確実性があるといい、パトロクレス—エラトステネスの系統を高く評価しているのである（Strab. II 1. 9）。また、アレクサンドロスの遠征に同行した人々は、遠征地についての粗略な知識を得るにとどまらうとしたが、アレクサンドロス自身は正確な知識を要求し、全てのことを記させた。その記述は、のちアレクサンドロスの財務官クセノクレスによつてパトロクレスに伝えられたと、パトロクレス自身が述べているという（Strab. II 1. 6）。このクセノクレスの名は、ストラボン以外に誰も挙げていず、その

人物については不明である。しかし、ストラボンの記述から、ペトロクレスがアレクサンドロス帝国の公文書を多く利用したのではないかといふことが想像される。

このように、ペトロクレスはストラボンによつて高く評価され、また彼に関する多くのことはストラボンが記しているのであるが、ストラボンは一度もペトロクレスのカスピ海探検にふれていない。最もそれに近い表現として、「エラトステネスはこの海の周囲がギリシア人に知られたと述べている」と挙げてゐるにすぎない。このことは、ペトロクレスが入手し得た資料、ことにアレクサンドロス帝国の公文書のみに頼り、後述するよう誤ったカスピ海の形状を述べたのではないかとも受けとれる。しかし、ストラボンはカスピ海東方の地理概念について、ペトロクレス—エラトステネスの系統を強調していることから、所々に「ペトロクレスによると」という表現が省略されているのではないかと推定される。それに、ひとりプリニウスのみが、ペトロクレスがカスピ海を周航したと述べているとはいゝ、それに続くカスピ海の記述はエラトステネスからの引用であつて、ストラボンがエラトステネスを引用して述べるところと全く一致する。そこで、ペトロクレスがカスピ海を調査したという事実を認め、カスピ海について、エラトステネスを引用していいるストラボンならびにプリニウスの記述をみてみたい。

そこに示されたカスピ海は、北の海の入海となつていて、入口から奥に入るにしたがつて広くなる。その全長は五〇〇〇スタディア以上、最大の幅五〇〇〇スタディア、またアルバニア族—カドウシオイ Kadousioi 族の沿岸の長さ五四〇〇スタディア⁽⁹⁾、アナリアカイ Anariakai 族—マルディ Mardi 族—ヒュルカニア族の沿岸—オクソス河口の長さ四八〇〇スタディア、そこからヤクサルテス河口まで一四〇〇スタディアある (Strab. XI 6. 1, Plin. N. H. VI 36)。これによつて、ほぼペトロクレスの航行の範囲を推定である。しかし、上記の距離と地域を考えてみると、航行の起点はカスピ海西側のアルバニアから南下したのではなく、おそらく南西岸のカドウシアからアルバ

ニアへ西岸を北上し、大体現在のアブシエロン岬に達したものとおもわれる。これが一つの航行である。他はカスピ海の南西岸から東岸へかけて、つまりアナリアキーヒュルカニアからヤクサルテス河とみなした地点までである。したがって、カドウシアとアナリアキの間、ほぼアモルドス（現在のサフィードルード河口辺）を出発地として、西方と東方へ二回航行したのである。ところで、東方への航行の終着点をどこに求めるかが問題で、パトロクレスの断片によれば、カスピ海に注ぐオクソス河とヤクサルテス河の両河口の間は八〇バラサング（四八〇〇スタディア）あるといふ（Strab. XI 11. 5）。この長さはエラトステネスの述べる距離とは異なるが、しかし古代においてヤクサルテス河が一度もカスピ海に注いだことはない。パトロクレスが八〇バラサングという単位距離で報告しているのは、おそらくカスピ海東岸の住民の話から判断したものであつて、オクソス河口と推定した地点で航海を中止したのではないかろうか。したがって、その航



第2図

行の終着点は、現在のアトレク河口をオクソス河口と判断したものか、あるいは当時カスピ海近くで水を満たしていたかも知れない旧オクソス河口、つまり現在のベレク近くとも予想され、カラボガズ湾より北に進んでいないと断定できるよう。⁽⁴⁰⁾ それゆえ、ペトロクレスがヤクサルテス河とカスピ海を結びつけたことは、彼のカスピ海探検の限界と、この海について下した判断がうかがえるわけである。それはギリシア地理学の伝統的なヘカタイオスの理論、つまりカスピ海が四大入海の一つであることを絶えず念頭において探検をおこなったこと、また内陸海第一の大きさを持つこの海が未知の海であったことは、航海に不安感を与え、南北の長さの半ばに達するまでに、北の大海上に接しているものとして引き返したのである。ペトロクレスがこの探検による見聞をいかに王に報告したか、その詳細は不明である。ともあれ、ストラボンの述べるところでは、カスピ海に航入すれば、右手にスキタイとサウロマタエ族が住み、左手には東方のスキタイで、東の海とインドに至るまでひろがって住むといふ (Strab. XI 6. 2)。一体、誰が北の海から航入し得たのであるか。ここにペトロクレスが、カスピ海は北の海に接すると判断した探検報告を、ストラボンの時代において実際に北の海から航入できるものと受取られ、またそれが正しいとして権威づけられて、プリニウスにまで影響を与えている。

II

ところで、一方アレクサンドロス伝に関して、稗史作家として取扱われる史家のうち、ラリサのポリュクレイオスがカスピ海に言及している。彼はカスピ海は湖であるといい、そこから蛇を生みだし、また水は甘いといいう (Strab. XI 7. 4)⁽⁴¹⁾。このポリュクレイオスがアレクサンドロスの東征に従軍したか、否かについては不明であるが、歴史書八巻を残したことなどが知られており、(Athenaios XII 55)、その著述年代については、アレクサンドロスの没後とみなされている。⁽⁴²⁾ ポリュクレイオスを引用していふのは、現存史料のうちストラボンの記述が最も古く、スト

ラボンは次のようにいう。つまり、アレクサンドロスの東征という名声のゆえに、アレクサンドロス史家は東方地理に対する誤った概念を与えた。その例として、タナイス河を受けるマイオティス湖は、また湖であるカスピ海と結合していて、この両湖は互いに地下水路によって結ばれ、各々がその一部をなしていると述べたあと、ポリュクレイトスを引用する。すなわち、彼もカスピ海が湖で、その水は比較的甘く、そこにタナイス河が注ぐことから判断して、この湖はマイオティスにほかならぬとしているが、そのタナイス河とはヤクサルテス河を指しているのである、とする⁽¹²⁾ (Strab. XI 7. 4)。およそ、ゼレウコス一世がカスピ海とマイオティス海を結ぶ運河の開鑿を計画したといふことからも (Plin. N. H. VII 31)、この両海についての知識は乏しく、またそれらが地下水路によって結ばれていたとしても不思議ではない。そこで、ポリュクレイトスがカスピ海を内陸海とした理由は、アリストテレスの場合と同じく、ヤクサルテス河つまりタナイス河がカスピ海の北側を流れ、マイオティス海に注ぐとみなしたためとおもわれる。しかし、カスピ海が蛇を生みだすという伝説の根拠は不明である。⁽¹³⁾

また、後にディオドロスとクルティウスもカスピ海を湖と述べている。この海の蛇と魚について、ディオドロスもふれているが (Diod. XVII 57. 3)、クルティウスの記述に、より多くの問題点がみられ、彼は「アレクサンドロス大王史」の中で次のように表現している。すなわち、この海は他の海より清く、巨大な蛇を生みだす。魚の色は他の海のものと非常に異なる。カスピ海またはヒュルカニア海とも呼ばれ、ある者はなおマイオティス湖の水がこの海に注ぐものとみなし、この海に流れる湖の水が塩分を和らげるゆえに、他の海より清いと考えている。また、一つの大海が北方に向かつてその波を押しやり、満潮のような非常なひろがりをつくつていて。天候の条件によつて海は退き、そしてそれが流れ込むのと同じ力をもつて流れ返すから、そこに陸地が現われる。それで、ある者はこれをカスピ海でなく、インドからヒュルカニア海への水路をもつオケアノスといい、その高い陸地は連続した谷間に陥没してい

る、と述べている (Curt. VI 4. 81)。このクルティウスの記述の前半は、ポリュクレイトスより引用していることは明らかである。また後半の部分については理解しがたいが、カスピ海の自然条件についてはパトロクレス—エラトス・テネスに由来する資料を用いたとも考えられる。クルティウスの中心典拠はクレイタルコスとされており、この点クルティウスが直接にポリュクレイトス、またはパトロクレスの記述を用いたか、あるいはクレイタルコスを通して利用したか、詳かでない。ともあれ、諸種の史料がクルティウスの記述にあらわれているのであって、ここにアレクサンドロス伝の史料系統の中心問題となるクレイタルコスの研究が必要である。しかし、ここでは一応問題外としたい。⁽¹⁴⁾

ここにおいて、アレクサンドロスの東征から探検の時代にかけ、カスピ海がマイオティス海に結合するという考えも従来の見解に加えられた。しかし、カスピ海に関する根本問題は、入海か内陸海のいずれか、ということにあり、パトロクレスによつて北の海の入海とされるに及んで、それがのち地理学上の正統的見解となつた。一方、ポリュクレイトスは内陸海とみなしたが、これはアレクサンドロス伝説中の挿話として取扱われ、しだいに正統的地理学と無関係となつた。

III

ヘレニズム時代にはギリシアの諸科学が発達したが、ことにプトレマイオス朝の保護による学術の奨励は、アレクサンドリア時代を出現させた。地理学の面ではプトレマイオス三世の招聘をうけ、第三代アレクサンドリア図書館長となつたエラトステネスが、従来の地理知識を集大成し、学問的に体系づけた。その著「地理学」三巻は散逸したが、その内容の概略についてはストラボンの記述から知ることができる。当時の地球球体説の発展にともない、エラトステネスは地球の大きさを測定し、それによつて、またオイクメネの範囲を東西六万スタディア、南北四万スタディア

ニアとし、各三対一の割合とした。この有名な測定方法は、ここでは別問題とするにしても、東方の地理知識、あるいはピュテアスのトゥーレ探検航海による高緯度の地域に関する知識等は、北半球におけるオイクメネの範囲を設定する重要な資料であった。また、そこからリビア、アラビアを含む全オイクメネを、連続する海洋が取り巻くと結論づけるに至った (Strab. I 3. 13)。つまり、エラトステネスがヨーロッパ大陸の北限は未知であると考えたのを、エラトステネスは限界づけ、ここにこれまでの地図の修正を必要とする一理由を認めたのである (Strab. II 1. 2)。

また、ストラボンによると、エラトステネスのアジアことにインドに関する記載が、ひとくばくクロクレスのみを正確として、その記述を用いたことにヒッパルコスは非難した、と述べている。ストラボンは、このヒッパルコスのエラトステネス批判が論外の誇張ではあるが、しかし一方ではエラトステネスがパトロクレスの記述を十分に信頼しえるものとして、多く利用したことを認めている (Strab. II 1. 4—9)。勿論、先に述べたようにペトロクレスによつて、ヤクサルテス河とオクソス河はカスピ海に注ぐ⁶⁶。北の海に連なるこの海からインドへの航行が可能であるとやれどが、それがエラトステネスの権威によつて固定された。また、エラトステネスは、キリキアのタウラス山脈が東方のヒンドウクシュー山脈に連なる大コーカサス山脈を想定し、その東をペロペニソス山脈、ついで東端をイマウス山脈とした。この山脈を境として、南にインド人、北はヤクサルテス河をはさみ、サカ族とソグド族、その北にカスピ海以東のスキタイをねむ、これをもつて北方オイクメネの限界とみなしたとおもわれる (Strab. XI 8. 1, 8; 11. 7)。イランではコニアキ Koniaiki 畠が東方に突出するものとし、これをオイクメネの最東端とした (Strab. XV 1. 11, 14)。このような構想についても、エラトステネスはペトロクレスの記述を多く用いたとおもわれる。ストラボンは、カスピ海からインドへの航行が可能であると述べたあと、スキティアの土地は東方へ行くにしたがい先細りとなり、イマオス Imaos の端、すなわちタマロス Tamaros 岬で刀の刃の先のようであるといふ、カスピ海から東

方の海のその岬まで、三万スタディアあると述べてゐる (Strab. XI 11. 7)。このよつた地形の概念は、ペトロクレス一ヨラーステネスに基づくものだ、その距離についてはヨラーステネスのオイクメネ測定の結果、計算され、これがストラボンに伝えられたものであら。

ところや、パリニウスによると、エラーステネスがカスピ海のカドゥシオイ族とアルバニア族の沿岸から、ヤクサルテス河口に至る距離を「五七五マイル」としたが、それに対しトルチベロスは「五マイル少なく見積った」と述べている (Plin. N. H. VI 37)。前一〇〇年頃に活躍したヒュソスのアルチベロスは、地中海、黒海、紅海のペリපルス (周航記) を著わし、また各地の距離を算定してゐる。しかし、東方に関する知識はエラーステネスより進歩した痕跡はない、カスピ海について各地の距離を計算したとも、数字上の合理的算出によつたものはない。

- 註(1) Tarn, W. W., Alexander the Great. I. 聚野頼之祐「アレクサンダロス」世界の歴史4・筑摩書房、一九六一年。
- (2) Plut. Alex. 68. 織田武雄、前掲書四五二頁。
- (3) Tarn, W. W., Hellenistic Civilisation. London, 1953. 240ff. 「」時代、ローマ帝政期の東方貿易に関する最近の研究によれば、柘植一雄「くノリバム時代における東南方貿易の発展」古代史講座13、学生社、昭和四年。秀村欣一「ローマ帝国とマンドー南海貿易に関する若干の考察」同書。小玉新次郎「A.D. 137年の『ペルシラ関税法』について」史林四四一六。拙稿「Charax の地理学者 Isidoros と Mansones Parthicae」やつはハムカ一回。伊瀬仙太郎「新版世界文化交流史」金星堂、昭和三八年。
- (4) Bevan, E. R., The House of Seleucus. I. London, 1902. 206ff. Meyer, E., Blute und Niedergang des Hellenismus in Asien. Berlin, 1925. (東田数々郎・1)訳著大訳「希臘主義の東漸」創元社、昭和十七年。
- Tarn, W. W., Bactria. 1ff. Rostovtzeff, M., Social and Economic History of the Hellenistic World. Oxford, 1933. 422ff. 聚野頼之祐「五十史綱」も「ギリシア史の研究」卯波書店、昭和十五年、一六七頁云々。

Tarn, W. W., Tarmita. Journal of Hellenic Studies LX (1940) 92ff.

(6) (5) LALLI, W. W., LAMINACK, JOURNAL OF LITERATURE STUDIES 1982 (MAY) 241.

パトロクレスの生存年代ならびにその経験については詳らかでない。しかし、初期セレウコス王国時代の重要な人物であつ

たことが確かである。その行動を知るにむかうるが、次の史料のとおりである。前二二一年、アレストロニス。カリギウスは、アレクサンダーの命をもつて、ダリオリトのスマラトガスの任についた(Diod. XIV 100. 5)。前一八七~六年には、タルソスやヤンカロバの行動をもつて、トランタルロバなど、「ヤンカラバの信頼ある友人で、賢者として名高いペトロクス」アレクシトス(Plut. Dem. 47. 2)。おもなヤンカラバの殺後、トランタルロバの脇下にあひて、ヤンカラバの知事であつたが、(Memnon IV. XVII) トランタルロバは Droysen, J. G., Geschichte des Hellenismus. III. S. 337. の肯定説。但足説 Niese, B., Geschichte der griechischen und makedonischen Staaten. II. S. 75 によると、ヤンカラバは決定的な結論を終らねば困難である。Bevan, E. R., op. cit., 132. Bengtson, H., Die Strategie in der hellenistischen Zeit. 2 Bd. S. 82. 参照。

また、パトロクレスによるカスピ海探検の時期についても不明であるが、おそらくセレウコスが東方支配の強化を企図した前一九三一一八〇年の間にわざわざモダマスがバクトニア地方のスマラトコベでいたペトロクレスは前一八五四五一八〇年の間にその地のスマラトコベであつた。考へられ、カスピ海探検の時期であらう。Tarn, W. W., op. cit., 93-94; Alexander the Great. II. p. 19.

(7) この問題については、アーチン所文の書に取上げたが、たゞ Tarn, W. W., The Greeks in Bactria and India, 483ff. ねども本稿の結語参照。

(8) バイント、ホィオグネンバ、クレンタのヒヤロニムス、アーリンタバ、カシパビキアのアルケラオス等の記録がスルトボハ、アリニウバ、アテナイオス、エリトスがたはその他の記述に散見あらるが、その断片についても、F. Gr. H. no. 119—

(9) ストラボンは、ペトロクレスによると、カニウシオイ族の範囲が五〇〇〇バターダーあると述べてゐる (Strab. XI 7. 1)。ペトロクレスのカヌー海航行の問題について Neuman, K. J., Patrokles und der Oxos, Holmes, XIX (1834)

165H. 以来、しあいが語譲われていくか。Klessing, M. (Hyakunia, F. W. K. Bd. IA, I. 404ff.) が述べていて面白い。パトロクレスの航海は古代地理学の難問の一つである。したがい、東へ四八〇〇スターヘアと云ふ航行の到達地点が問題といわれ

れ、Klessing, M., op. cit., 466. によると、ラトステネスはその数字を切上げて五〇〇〇スタディアとし、カスピ海の東西の幅の長さを二千五百メートルと算定した。しかしそれはペトロクレスが南岸を航行した距離から得たものであり、またペトロクレスも過大に見積った航行距離を報告したことから考へねばならないことである。したがつて、ペトロクレスはシヨルカニア沿岸の直角に屈折した場所で、原住民が「ソヌス」と呼んだ大きな河の河口を確かめ (Plin. N. H. VI 36)、それによつてオクンス河口を発見したと信じて引返したのである。キーベリンゲは「ノス河とは現在のトルンク河を指す」と推定し、ペトロクレスの航行はアトレク河より遠くに及んでいたことだ。これに対し、Hermann, A. Kaspisches Meer. P. W. K. Bd. X, 2. 2281ff. は、ヒトラーベテネスが与えたカスピ海の東西の長さ五〇〇〇スタディアをゆりて、その南岸の長さ、つまりペトロクレスの航行距離四八〇〇スタディアに相当するとは早計であるといし、東岸を北上してこられたと考へた。それにオクンス河がウズボékを通じてカスピ海に注いでいたこと、ペトロクレスの航行をその河口とみなされた、アトレク河口の北一七〇キロメートルの地帯が示された。この議論以前 Tarn, W. W., Patrocles and the Oxo-Caspian Trade Route. Journal of Hellenic Studies XXI (1901) 10ff. もくべき説に近い理解をもつてゐる。その後 The Greeks in Bactria and India. P. 113. などにてキーベリンゲ説を支持する。また Gisinger, F. (Patrocles. P. W. K. Bd. XVIII, 4. (1949) 2267ff.) も議論の余地を認めながら、キーベリンゲ説に傾いてゐる。Thomson, J. O., op. cit., 128. の場合似た様である。

- (11) Tarn, W. W., Alexander the Great. II. P. 8. Gisinger, F., Polykleitos. P. W. K. Ed. XXI, 2. 1701. Pearson, L., op. cit., 68ff.
- (12) ノスバーナーの記述ながら、ヨコクライベの表現を明確に理解した。Pearson, L., op. cit., 76.
- (13) 前六六年、アハヤイウスはアハヤ王マニラタス六世討伐のため、黒海南岸を東進してくるが、アルタルコスにみやがれながらシザロス河を越え、トスカリナ人の地をカスピ海の方向に向かって進んだとめ、猛毒を持つ多数の蛇に行軍を阻まれたと述べてゐる (Plut. Rom. 36)。
- (14) クルト・イカスが「一方ではカスピ海はヒュルカリア海と呼ぶれど、他方ではそれを別個の海として取扱つてゐる」(Curt. VII 3. 21)。この記述には統一性がみられない。
- (15) 藤野頼之祐「アレクサンドロスのアムモーン参拝と世界意識『全人類の同胞的觀念』の誕生に就く」〔史學雑誌四七〕[1]。クライタルコスがアレクサンドロスの東征に従軍したか否かについて、Tarn, W. W., op. cit., 5ff. は問題点をカスピ海周

辺に関する記述から取り上げ、クレィタルコスはパトロクレスを利用してゐる論証し、また彼がヒュルカニアないしがドロシア以東の地域に進んでいないと結論づけ、その記述は第二次的な史料としている。しかし、Pearson, L., op. cit., 227ff. はクレィタルコスの記述をパトロクレスと関係づけず、彼の父ディオンの著「ペルシア誌」の影響に結びつけるべきであるとして、ターンに反論している。

四 ローマの東進とカスピ海周辺の地理知識の発展

ところで、東方の地理知識はローマの東進とともに、より発展した。その東進政策はヘレニズム諸国を各個撃破することにあつたが、ことにセレウコス王国のアンティオコス三世をマグネシアの戦で敗退させ、まず東地中海の支配を確実にしていった。ポリュビオスはこのローマの発展を記述するにあたつて、東方の地理にふれているが、ユーフラテス河以東インドに至る地域に関しては、エラトステネスの記述に信頼をおいている。しかしまグネシアの事件以前、アンティオコス三世のバクトリアに至るアナバシス（遠征）を述べたとき、オクソス河について、この河は多くの支流を集め、平原を流れるが、途中に大瀑布があると、かなり詳しく記しており（Polyb. X 48）、そこには新しい知識が加えられたことを示している。さらに、前一世紀以後、ローマがポンチス、アルメニア、ペルティアの各王国を攻撃して進出してきたことは、それらの地域の地理を一層明らかにした。つまり、第三次ミトリダテス戦中、前六九年にルクルスの率いるローマ軍は、ポンチス王ミトリダテス六世を追つてアルメニアに侵入し、アラクセス河流域の寒冷気候と沼沢地のために、行軍に難渋した。しかし、この時ヘロドトス以後しばしば問題とされていたアラクセスの流れが、アトロペテネの北を通りカスピ海に注ぐ事実がつきとめられた。統いて、前六六年にポンペイウス

軍はアルメニア北部、キヨロス上下流域のアルバニアに侵入し、コーカサス山脈南部を明らかにした。この地域の地理については、ポンペイウスに従軍したミテュレネのテオファネスが詳述したと考えられるが、誤つてタナイス河がコーカサス山脈から発し、北流してからマイオティス海に注ぐとし (Strab. XI 2, 2)⁽¹⁾、それにキヨロス河がアラクセス河と合流するとみなしたことは、後代の地理学に混乱を与えていた。

また、ストラボンによれば次のように述べている。『おもにアレクサンドロスの東征について記した史家が、その名のゆえにアジアに関する事実を歪曲したが、ローマとペルティアが霸権を争うた衝突は、かつて伝説として伝えられたより以上の知識を明らかにした。すなわち、東方の遠隔地について記した人々は、彼ら以前の人々よりも、事件が起きた場所や、その民族について、より信頼できる話を述べている。といふのも、それらの情報を、より近くで調査しえたからである (Strab. XI 6, 4)。また、ヒョルカニアとバクトリアについての知識は、アルテミタのアポロドロスに負うところが多いといふ、その記述を引用している。このアポロドロスは前一世紀の半ば、「ペルティア史」四巻を著わしており、おもにイラン高原を通る主要路について詳しく述べたとおもわれるが (Strab. XI 9, 1)⁽²⁾、その散逸は惜しまれる。

テレンティウス・ワルロによれば、インドからバクトリア地方へ、七日行程でオクソス河支流のバクトロス河に達し、インドからの商品はバクトロス河より、次にカスピ海を通りてキロス河へ運ばれ、そこから陸路五日以内でポントスのファンシスに至ることが、ポンペイウスの遠征時に確かめられたといふ (Plin. N. H. VI 52)⁽³⁾。これはペルティア王国が、その国力の発展にとまない、イラン高原からメソポタミアに通じる中央交易路を掌握したのと、その経路による商品に対しても多額の交易税を課したため、カスピ海を通る交易路が活発化したことを裏づけるものである。ポンペイウスの遠征以後、前三七年にアントニウスの将軍クラッス・カンティウスがイベリア人を服属させており、また

アウグストゥスからティベリウス帝の時代、アルビニア、イベリアはローマ帝国の保護国とされた。その後、政変によつてネロ帝はイベリアに軍隊を送つてゐるが、先にヒュルカニア人が対バルティア問題でローマとの同盟を希望したことがあつて (Tacitus Ann. XIV 25)、カスピ海西方に対する関心が深かつたことを示してゐる。⁽²⁾ 約元七年にウェスパシアヌス帝は、コーラカサス山脈を越えて侵入するアラン (阿蘭) 人を防禦するため、ハルモディアに駐屯所をおき、交易の保護に当たつたとおもわれることは、いかにこの地域が重視されていたかがうかがわれる。

II

アウグストゥスの時代、アグリッパは多くの道程記録を用いて世界図を作成した。その東方地理に關し、彼がアポロドロスを利用したか、どうかは不明であるが、アグリッパはカスピ海と、アルメニアを含めたそれを取り巻く民族は、東方はセレスの海、西方はコーラカサス山脈、南方はタウラス山脈、北はスキティアの海で限界づけ、カスピ海の長さ四八〇マイル、幅一九〇マイルとした。しかし、ある者はこの海の周囲は海峡の部分をも問題として、一一五〇〇マイルとする。ヒプリニウスは述べてゐる (Plin. N. H. VI 37)。この頃になると、カスピ海は細長い入口を持つ日月状の海とも考えられ、テレンティウス・ワルロはその形状を槍の穂先に比した (Plin. N. H. VI 38)。また、ポンピュウス・メラの場合もワルロに似ているが、三個の湾を持ち、河のような狭い海峡によつて北の海に続いているといつてゐる (Mela III 38—9)。この表現からブトレマイオスにみえるラー河の存在が幾分か推測されるのであるが、北の海と連続するという考えは失われていはない。

むしろ、ストラボンの記述については、しばしば参考してゐたのであるが、いま一度問題となるカスピ海北方の主要記述を取上げてみたい。そこには、アジアの第一の地域、つまりタナイス河と北の海に續くカスピ海の間は半島のようであるとし、北の海から南へかけ、スキタイ、サウロマタエ族、次にアオルシ族、シラキ族がコーラカサス山

脈にまで至つてゐる (Strab. XI 2, 1)。このうち南の方に位置するアオルシ族、シラキ族は、上部と称される同族の分れとおもわれ、ことに上部アオルシはカスピ海沿岸の大部分を占めるため、彼らは駱駝によつて運ばれるインドヒベビロニアの商品をアルメニア族やメディア族と交替して受取り輸入することができたと述べてゐる (Strab. XI 5, 8)。また、第一の地域はカスピ海の東であつて、この海に北から航入すると、左側にダアエまたはアペルリム^{アム}がれるスキタイの一部族が住む (Strab. XI 5, 6, 8, 1)。カスピ海から東へ進むと、右側にインドの海に至るタウラスの連山、左側にはダアエの次にスキタイと総称される民族とし、北の海に接するものとしている (Strab. XI 8, 1—2)。じのようストラボンにおいては、カスピ海の西岸は詳しくなつてゐるが、北の入海から東方にかけた地域の記述は全く漠然としているのである。

がた、プリニウスもカスピ海は比較的長い水路によつて、北のスキティアの海に通ずるものと考えた。その入口の部分は周辺に居住するスキタイの名に因んで、スキタイの湾、次いで湾入して右側のアルバニア族の居住する範囲ではアルバニアの海、キユロス河以南はその沿岸のカスピ族の名によつてカスピ海、ヒュルカニアのシデリス Sideris 河以東はヒュルカニア海といふように呼ばれてゐると、述べてゐる (Plin. N. H. VI 38—9, 46)。その記述の中や、カスピ海への入口の狭い水路をスキタイが往来していく、一方の側には多くの部族からなるサウロマタエ族、他の側は現在奄蔡とみなされているアブゾアエ Abzoae 族が住み、これも種々の名で呼ばれるといふ。また、この海の北岸、すなわち水路口の右側にスキタイの一部族ウディニ Udimii 東側にはタリ Thali 族が広い場所を占拠しているとする (Plin. N. H. VI 17)。カスピ海東方についてもプリニウスはかなり多くの民族名を記しているが、ストラボンの記述とは異なり、それらを列挙するにとどまり、十分な説明を与えていない。一方、カスピ海北方について、スキティアの海の沿岸を東に進むと屈曲し、東の海に面するとしている。その間はスキティアの岬、雪のために無住となつてい

る地域、食人スキタイ、野獣のいる荒漠とした地域、再びスキタイ、また野獣のいる荒野を経てタビス岬の断崖、ついでセレスの居住地があると述べていふ（Plin. N. H. VI 53—54）。これはメラの記述と同様であり、同系の資料を用いたものとおもわれる。また、⁽³⁾ そのような地理概念はヘレニズム時代以後の所産であるうが、タビス岬の存在がいかなる理由によつて認められたかは不明である。

III

1世紀半ばになると、古代最大の科学者と称されるクラウディウス・プトレマイオスは、前にテュロスのマリノスが世界の主要地点の位置決定を試みていた記述を修正して「地理学」八巻を著わし、数理地理学の分野に大きな業績を残した。そのカスピ海の記述についてみると、この海を内陸海と認める（Ptol. VII 5, 4）⁽⁴⁾ この北岸に注ぐラー（ヴォルガ）河の存在を指摘しており、それによつてペトロクレス＝エラトステネス以来の外洋に連なるという論拠は抹殺された。また、この海に注ぐ大小二十一の河川を記しており、その中にはヤクサルテス河、オクソス河も含めているが、各河口の位置からすれば、この海はヨーロピストの述べるようだに大きくはないが、しかしその形状は同じく東西に長く南北に短くなっている。

そこで、カスピ海北辺についてみると、アザーラー河を境として、その西側には非常に過大視されたマイオティス海と、そこにはアタナイス河までの間にアジアのサカラタニア族を配した。そして、ラー河以東には、プトレマイオスによる経度一四〇度をもつて南北に連なるイマウス Imaos 山脈まで、「イマウス山脈内側のスキティア」とする広大な地域を想定し、さらにこの山脈の東を「イマウス山脈外側のスキティア」として、カスピ海北辺より東方を從来のようにスキティアの名称で総括している（Ptol. VI 14, 15）。むしろ、ラー河は伝説的なヒュペルボレイ Hy-perborei の名を持つ山脈の東西端の一支部流（東の支流はロボスキ族の居所、プトレマイオスによる北緯六一度）か

ら流れるものとしているが、この山脈の北にヒュペルボレイ・スキタイ族をおも、この民族以北は未知の大陸」と、クロムースと同様に北の海の存在を認めていない。また、プトレマイオスによれば、ラー河は中流の北緯五六度地点で西方に屈曲してタナイス河に非常に接近し、再び南東方向に流れ、カスピ海に注いでいる。これがどのような資料によつたものか不明であるが、プトレマイオスの記述をみると、ラー河全流域に沿つて北から南へかけ各異なつた民族を配していることは、この河の流域を通つた旅行者の報告に基づいて、各民族の位置と河の流れの方向を決定したのである。この河のカスピ海へ注ぐ河口にエリュミ族、その東にアシオタエ族、アオルシ族と順番に配し、その東にヤクサルテス河口をおいている。このヤクサルテス河がカスピ海に注ぐことは、従来の見解を踏襲したものと考えられ、プトレマイオスの時代においても、まだカスピ海北東岸について十分な知識がえられなかつたことを示している。しかし、ヤクサルテス河以北の「イマウス山脈内側のスキティア」において、各民族をそれぞれ南北へ、また東西に順次配しているため、この地域には交易路が発達していたとも受取れるが、その記述から直ちにプトレマイオスの時代にカスピ海北方を東西に通過する大貿易路の存在を認めるとはできない。⁽⁵⁾

まだ、四世紀にはアンミトヌス・マルケリヌスがプトレマイオスと同様ラー河の流れを記し、カスピ海を内陸海としている (Ammianus XXII 8, 28)。そこみられる東方全体の記述はブリニウスの見解にプトレマイオスの地理を合成したもののみなれていふ。しかし、カスピ海について、北岸近くをカスピ海、メディア・ヒュルカニア地域ではヒュルカニア海としており (Ammianus XXII, 8, 27, XXIII 6, 27)、ブリニウスまたはプトレマイオスのように明確に一つの海と記さず、その表現に統一性がみられない。

ところで、アンミトヌスはユリアヌスのペルシア遠征の記録に際して、ペルシア帝国とその東方の地理にふれていくが、その中でソグディニア族の居住する地域をアラクサテス Araxates 河、ドーマス Dymas 河が流れ、これら

の流れがオクシント Oxia 湖を形成してゐる(アミアンス Ammianus XXIII 6. 59)。この湖がアラル海を指するのか、どうかについて従来問題となれていた。たとえば、プリニウスは「ドレビケス族の領域をオアクソス Oaxus 湖から発するオクソス河が流れ」と(Plin. N. H. VI 48)、またトレンマイオスはオクシア湖からソグディアナの河が流れるとしているが、その河の名を記してゐない(Ptol. VII 12. 3)。トレンマイオスの指すデルビカエについては、プリニウスのいうドレビケス族のこととおもわれ、マルギアナに位置する、この地域の近くをオクソス河が流れるとする。やがて、トレンマイオスによると、オクソス河の源流はバクトリアナの東域(経度一九度三〇分、北緯三九度)といし、オクソス河はオクシア湖から発することなく、あたそこから流れるとも述べていない。このようにプリニウス、トレンマイオス、アンニアヌスの記述はそれぞれ異なつてゐる。

他方、ストラボンによると、マサガタイ族とキヨロスの戦は有名で、多くの人が記しているが、それらによるところの民族は山間、平野、河によってできた沼沢、それに沼沢中の孤丘等に住んでおり、またこの地域の大部分を氾濫させているアラクセス河は多くの分流を有し、「他の北の海に」注ぐが、一河口のみがヒュルカニア海の沿岸に至つてゐるといわれる、と述べてゐる(Strab. XI 8. 6)。この伝承はヘロドトス以後、幾度か書き変えられたものである。しかし、ストラボンの記述からいへば、やがてみえる「他の北の海」とは、北方のオケアノスを指すものではない。また、ここにいうアラクセス河はオクソス河、ヤクサルテス河いずれでもないが、アラクセスの河名に対する混乱を、ストラボンが指摘しなかつたことは確かである。ともあれ、ストラボンの直接の資料は何によつたものであらうか、不明であるが、もしそれが「ペルティア誌」を著わしたアポロドロスの記述に由来するものとすれば、ストラボンの「他の北の海」とはアラル海を指すとも考えられる。

ところで、問題となる湖を考えると、プリニウスはオアクソス湖からオクソス河が、またトレンマイオスはオク

シア湖から無名の河が、それぞれ発するところであるから、いずれも河の源を湖に求めている。このことはブリニウスの表現を、ブトレマイオスが旅行者の報告、たとえばマエスの旅行案内書によつて修正したともおもわれ、両者のこの湖についての地理概念に共通性が認められるのである。それに対し、アンミアノスによればオクシア湖にアラクサテス河とデュマス河が注ぐのである。このデュマス河は、ブトレマイオスのいうヤクサルテス河に合流するデュマス河と同一であろうが、ブトレマイオスの場合、その河をオクシア湖と関係づけず、源流とオクシア湖の経度差を約一二度弱とみなしている。したがつて、湖の表現に関して、アンミアヌスとブトレマイオスの述べるところでは、かなり違いが認められ、アンミアヌスはブトレマイオスの記述を書きえたにすぎないとするE・H・バンビュリ以降の見解を直ちに受け入れることはやむを得ない⁽⁶⁾。つまり、アンミアヌスのいうアラクサテス河は、ストラボンの記述にみえる「他の北の海」に注ぐアラクヤス河のことと認められ、アンミアヌスはストラボンと同系の史料を利用したか、あるいはそれに四世紀頃における新しい知識を付加したのではなかろうか。

ともあれ、アラル海の存在はアレクサンドロスの東征時ではなく、ほぼ前一世紀じらから漠然と予想されていたとおもわれる。しかし、古代を通じカスピ海東方の地理的な不明確さと、ヤクサルテス河がカスピ海に注ぐという地理記述の伝統、さらにそれがブトレマイオスの地理学の権威の前に、アラル海に注ぐ河名を正確に表現しえなかつたと考えられるのである。

註(1) 現在、クラ河とアラス河は合流しているが、テオファネスの時代にギヨロス河とアラクヤス河が合流していたか、どうかについては、その結論を得るには困難である。だいぶ後で、ペルセウス(XI 2, 4)、トムコマイオス(VI 13, 6)は別個の河口を持つたとし、メル(III 40, 41)、ドリヤク(N. H. VI 26)、ミルヘル(Mithr. 103)、ポンペイ(Pomp. 34)は合流してこたとある。Tozer, H. F., A History of Ancient Geography, 2nd ed. New York, 1964 p. 221. ザルナハネス

の影響が、マウゴードに記された「*カスビアの港*」、「*カスビアの港*」、Thomson, J. O., op. cit., 171. の誤解は反対である。

- (2) Charlesworth, M. P., *Trade-Routes and Commerce of the Roman Empire*. Cambridge, 1924. p. 107. Teggart, F. J., *Rome and China*. Univ. of California, 1939. (三崎昇訳「ローマと支那」三一書房、昭和十九年)

- (3) Bunbury, E. H., *A History of Ancient Geography*. vol. II. p. 414.

- (4) プレコラボスの^レ河口（カスピ海の大河）、「東西の最端地点の各緯度はスキティアのボリュテイクス Polytites 河口（100度）、アルバニアのキロラス河口（七八・四〇度）、また南北の場合の各緯度はメドベトのベントルス Storatonis 河口（四〇度）、アシタのサルマホイアのラー河口（四八・五〇度）である。したがつて、アレニアイオスによる一經緯度を五〇〇スタディアへし、ここに挙げた經緯度差のみを計算すると、東西一一七七七スタディア、南北四一七七八タディアとなる。

- (5) 古代において、カスピ海北方のステップ交易路に関する主要な記録は、クロムス以後見当しない。その理由として、ハニズム時代とローマの東方進出時代初期におけるユーラシア北方地理に対する偏見、それに「パルティア駿臺誌」また「ヒュリュトウラー海案内記」にみられるように、主要交易路としてカスピ海南方陸路と、アラジア海やインド洋の海路が利用されたことにある。

ところが、カスピ海北方路は民族移動の経路であり、それはまた十分に交易の役割を果たしたことを見せていく。しかしながらアラン人を征服して西進したフン族が、はたしてどの程度通商をおこなったかは不明である。むしろ、アトルマヤスオガアラニ・スキタイの名称で呼んだアラン人 (Ptol. III. 5. 19) はカスピ海北岸の半遊牧民の集團であったとおもわれ、四世紀までにはアラン種族同盟を確立して定着生活を営み、周辺民族と通商関係に入つたと考えられるが、アトルマイオスの時代には、通商よりも略奪行為を主としていたのである。

そのあと、ステップ交易路が発展するのは、まず文献上ビサンティンの史家メンデロスの記述以後である。つまり、突厥王シルジール・カガンがササン朝ペルシアとの通交に失敗して、五六七年ソグド商人マニアックをユスティニアヌス帝のもとに派遣し、絹貿易を前提として両国の使節交換がおこなわれたことはよく知られている。内田吟風「柔然アヴァール同族論に関する諸問題」東洋史研究二二一。平井尚志、角田文衛「遊牧民と古典帝国」世界考古学大系9平凡社、昭和三七年。松田寿男「東西文化の交流」至文堂、昭和三七年、第三章。同「東西絹貿易」古代史講座13、学生社。Yule, H. and Cor-dier, H., *Cathay and the Way Thither*. vol. I. 205ff. (東亜史研究会訳編「東西交渉史—支那及び支那への道」帝國書

院、昭和一九年) Thomson, J. O., op. cit., 294.

(6) Bunbury, E. H., op. cit., 64ff. Thomson, J. O., op. cit., 294.

結語

以上のようにカスピ海に関する地理記述を、ヘカタイオスからプリマイオスないしはアンミアヌスに至るまで取り上げた。その間、東方の地理事情はしだいに明らかにされているが、しかしながらカスピ海の形狀に対する記載の変遷を見るところ、この海の北辺がかなり明確に知られた時代においてのみ、内陸海と認められているのであって、地理知識の時代的發展の過程と必ずしも一致していないことを示している。つまり、カスピ海北辺の知識は、そこを通るステップ交易路の利用頻度によって、また西方世界ことにローマ帝国とカスピ海周辺民族の通商あるいは闘争による接触によつて得たことはいうまでもない。

ここに交易路の役割を考えるととき、まず中央アジアとヴォルガ流域の間は早くから民族移動の経路であったことがおもいわれる。ヨドトスの述べるスキタイの黒海沿岸への移住、そのあと一二世紀におけるモンゴル族の西進とキプチャク汗国の成立に至るまでを振返つてみても、しばしば大移動があつた。しかし、西漸民族の大部分は遊牧民であつて、そこには各民族の消長、定着と混乱の繰返しがあつた。したがつて、ステップ交易路が安定していたのは、東西貿易が發展してゆく過程において、各民族の勢力が均衡状態にあるか、または強大になつた民族が勢力を扶植した時期であつたとみなされる。それゆえ、前五世紀ヘヨドトスの時代は、前者のように民族間の勢力安定の時期とおもわれ、黒海沿岸のギリシア植民がスキタイと友好関係を保つことによつて、北方の地理事情を知りえたのであ

ろう。また、後者の例としては、六世紀半ば西突厥がササン朝ペルシアによる東西貿易の中間搾取をさける理由もあって、ソグド商人を使い東ローマ帝国と絹貿易を試みており、ステップ交易路が最も活発になるのはこの時代以後である。

しかし、問題はアレクサンドロスの東征と、それによつて東方事情の知識が拡大されたヘレンズム時代の地理的見解である。つまり、ギリシア人はバクトリア、ソグディアナあるいはインドに至る地域についてかなり正確な知識をえた。ところが一方では、カスピ海南方周辺に対する地理的知識の強調、それとイラン高原を通る交易路の重要性によつて、ヘロドトス以来のカスピ海を内陸海とする地理学的伝統が無視された。そのうよな地理知識の後退を決定づけたのは、前三世紀初めパトロクレスによるカスピ海探検が不正確であつたことに起因する。このことから、セレウコス王国の北辺領域に対する知識がいかに曖昧であつたかを知ることができよう。それに前三世紀後半、バクトリア王国、ペルティア王国の独立と、ことにペルティアの勢力西漸によつてセレウコス王国は早くも東方領域を失うが、このことがヘレンズム時代における東方地理知識の停滞を招くことになつた。

また、ヤクサルテス河がカスピ海に注ぎ、カスピ海が北方オケアノスの入海であるという地理的誤認は、もちろんオクソス河がその海に注ぐという帰結を導いたわけであるが、そのような地理的見解と、パトロクレスが言及したカスピ海を通る交易路をいかに説明すべきであろうか。この場合、オクソス旧河道を行路として黒海岸に達しようとなれば、カスピ海を渡り、キュロス河を通るのが最短路であつたことは否定できない。ただそれが何時頃から利用されたかということが問題になるのであって、前一世紀以後ペルティアが西アジアの主要な陸上交易路を掌握した時代にはもちろん考えられる。しかし、ヘレンズム時代初期、セレウコス一世がカスピ海からインドへの航路発見につとめ、またカスピ海と黒海の間に運河を開鑿しようとした計画を知るとき、当時そのような地理的偏見と、カスピ海北

辺のステップ交易路が混同されたとするのも一つの見方であろう。それに、パトロクレスが探検したカスピ海の東西両岸の最北端が、この海を横断するほぼ最短距離であったことは、カスピ海航路による交易が可能であることを示唆し、それがしだいに利用され、やがて前一世紀になると、ローマ側の東方進出とともに重要視されたとおもわれる。

ローマ帝国の膨張は東方の地理事情を再び明らかにし、それによってプトレマイオスはカスピ海を内陸海と記したが、しかし四世紀のアンミアヌス以後になると、東方地理はプトレマイオスの記述を脚色するにすぎなくなつた。しかも五世紀初めヘラクレイアのマルキアノスはプトレマイオスの記述を用い、ペリ普ルス（周航記）を著わしたが、その中でペルシア湾はカスピ海に対して、両海はアジアの大地峡を造つていると述べており、その表現からするとカスピ海の内陸海としての存在が疑わしくなつてゐる（Marcianos I. 15. GGM I. 225）。一方では、アウグスティヌスが聖書の権威によつて地球球体説を否定したことから、プトレマイオスの「地理学」はしだいに無視されていつた。そのような聖書中心の時代的風潮から、マルティアヌス・カペラはオケアノスが全地上を囲むというメラやプリニウスの記述を尊重し、そこにはかつての「マケドニア人によるインドからカスピ海への航行」を認め、カスピ海を西洋の入海とみなした（Satyricon VI 619）。このような見解は、カラカルラ帝時代の道路図を参照して四世紀頃に原図が作成されたとみられるタブラ・ポイティングリアナの地図、または六世紀のコスマス、七世紀のイシドールにもみられるところであり、西洋中世には当然カスピ海が外洋に連なるものとされた。⁽¹⁾ それに対し、東方ではプトレマイオスの影響から出発したイスラム地理学が発展し、九世紀ないし一〇世紀には、タバリスター、ジュルジャーンほか種々の名称を持ち、一般的にハザールの海と呼ばれたカスピ海、それにアラル海が明らかにされていた。

ところが、一二世紀半ばになるとフランチエスコ派の僧プラノ・カルピニとルブルクは、モンゴル帝国と西方クリスト教世界の接触にともない、それぞれカラコルムまで派遣された。彼らの旅行はいざれもヴォルガ河畔にあるキブ

チャク汗国の首都サライを経由しており、それらの旅行報告によつて、カスピ海は再び内陸海と認められることがとなつた。ことにルブルクは一一五三年黒海から出發し、帰途はカスピ海西岸を通つてゐるが、その著名な記録の中で、イシドールがカスピ海と呼んでゐるのは、ペルシアでは海岸の町名に因んでシルサン湖ともいわれていて、北は平地で他の三方は山に囲まれ⁽²⁾、これを一周するには四箇月かかるといふ。イシドールが北の海の入海であると述べたのは誤りであると指摘している。しかし、その後もカスピ海の形状については誤った考へが一般的であつた。やがて、近世においてピートル一世が領土拡張に力を注いでいた時期、彼はアム・ダリアの河道を変更して旧河道に水を流せば、カスピ海を経てインドに達する水路を確保であるといふ情報をえたことから、一七一五年まづカスピ海の調査に着手した。この南進政策は失敗したが、カスピ海が西方世界に初めて正しく知られたのは、ピートル一世の調査以後のことである。

註(1) 織田武雄「中東の中東圖」といふ」史林[11][1]—図。

- (2) Beazley, R., *Texts and Versions of Carpini and Rubruquis*. London, 1903. 護雅夫訳「中央アジア・蒙古旅行記」桃源社、昭和四十年。妹尾韶夫訳「リハアルタク東遊記」文松堂書店、昭和一九年。柴村忍「十一世紀東西交渉史序説」[1]看堂、昭和一四年。Kimble, G., *Geography in the Middle Age*. London, 1938. 132ff.

——関西学院大学文学部助手——

通記 本稿は、「関西学院史学」九・一〇合併号の会報にみられるように続栗野頼之祐先生退職記念論文集（「関西学院史学」）の一端に加えられる予定であったが、今回「人文論究」に掲載かねていたが、同先生に奉呈すべしに思つた。